

名古木の棚田から 「米づくりと生物多様性・気候変動」 を見る

NPO法人
自然塾丹沢ドン会

2025年10月31日(金)

神奈川県環境科学センター

「環境学習リーダー育成講座」

NPO法人自然塾丹沢ドン会 片桐 務

CONTENTS

1 名古木にフォーカス～神奈川の自然のいま

- ・神奈川の生物多様性ホットスポット 191
- ・神奈川県要注意外来種リスト(神奈川県ブルーリスト) 226
- ・首都圏のみどりの砦・丹沢と山ろくの里山 ①県内唯一の秦野盆地と命の水
- ・戦後の農地の変遷と荒廃 ②名古木の歴史と棚田

2 棚田の復元と米づくり～有機無農薬・自然の恵みに感謝

- ・荒れ地を開墾～棚田の復元 ①手づくり堰堤と水路掘削
- ・自然の恵みに感謝！～太陽と水と大地へ
- ・冬期湛水と循環する田んぼの土づくり ②人力による有機・無農薬の米づくり
- ・米づくりの師匠は丑松さん、光治さん

3 担い手づくり～都市と農村をむすぶ「丹沢自然塾」

- ・「丹沢自然塾」のカリキュラム ①「丹沢自然塾」の募集要項
- ・「丹沢自然塾」の活動 ②「丹沢ドン会の想いとテーマ
- ・ドン会会員・自然塾生の構成 ③2025年「自然塾」塾生のデータ

4 継続が力に～Do for Nature「丹沢ドン会」とは？

- ・「丹沢シンポジウム」開催から33年 ①情報発信①出版・雑誌掲載
- ・情報発信②新聞掲載記事 ②情報発信③テレビ・ラジオ
- ・活動を支えた官民ファンドと受賞・選定のあゆみ
- ・ドン会活動と環境省・自治体との連携・協働 ④大学・企業との連携・協働
- ・農水省「つなぐ棚田遺産」県内唯一「名古木の棚田群」の選定(2022年3月)
- ・第20回石井進記念「棚田学会賞」受賞(2024年8月)

5 ドン会活動とネイチャーポジティブ～生物多様性のいま

- ・遊び・深める「生物多様性緑陰フォーラム」 ①次世代へつなぐ～丹沢こども自然塾
- ・生物多様性のいま～名古木の棚田の自然総合調査
- ・自然調査の成果～「丹沢山ろく名古木 棚田の生き物図鑑」
- ・ドン会活動とネイチャーポジティブ～よみがえる水生昆虫・植物

6 棚田から見える～地球温暖化・気候変動

- ・地球温暖化・気候変動の影響は名古木の棚田にも
- ・ケリラ豪雨・台風の被害と官民協働の復旧作業
- ・台風10号の遠隔豪雨による名古木の棚田の被害
- ・水路掘削・崩落法面の土留め作業 ②水路復旧・法面土留め完成

7 仲間づくり～自然の循環と人の循環

- ・自然の循環を支える人の連なり
- ・活動の継続・仲間づくりのヒント(あいさつが一番！ 平らかな仲間づくり 個性を尊重し得意技を生かす 楽しく活動・居場所づくり)
- ・世代交代プラス世代循環 ③名古木の「サンマ」～時間・空間・仲間

8 生物多様性に富んだ名古木の棚田を未来へ

- ・未来の子どもたちへバトンをつなごう！

首都圏のみどりの岩・丹沢と山ろくの里山

秦野市広報(2025年6月1日)より

県内唯一の秦野盆地と命の水

寺山
●ドン会棚田
名古木
国道246号線
小田急線
秦野駅
Google

秦野市: 首都圏のみどりの岩・丹沢のふもと、県内唯一の盆地・天然の水ガメの水量は7億7千万トン(芦ノ湖の約4倍)、水道水の7割は地下水でまかぬ、全国名水百選・日本一美味しい水。市面積の約53%が森林、中央に市街地・農地が分布(東西約13.6km 人口16.2万人)

NPO法人自然塾丹沢ドン会活動フィールド
(秦野市名古木: 市街化調整区域)
新宿から: 小田急線ロマンスカーで約1時間
横浜から: 相鉄線～小田急線で約1時間

秦野駅から: バス10分～徒歩12分
国道246号から: 直線800メートル

戦後の農地の変遷と荒廃

秦野市寺山
環境省・里地里山保全再生モデル事業実施地域(平成16年～)の資料「神奈川県秦野市の概要」(ケーススタディー)より

① 1946年(S21)
・緩傾斜地のほとんどは畑など
の耕作地(1 全体)
・樹林地の樹高は2002年に比
べて低い(2)

② 1967年(S42)
・緩傾斜地のほとんどは畑、果
樹園の耕作地(全体)
・斜面の樹林地の樹高がやや高
くなる(2)
・緩傾斜の畑が減少し、果樹園
の面積が増加(3)

③ 1988年(S63)
・一部はゴルフ場開発(4)
・畑地にスギ、ヒノキの植林(5)
・果樹園の放置、転用が見られる(6)
・一部に竹林が見られる(7)
・畑地はほとんど見られない(全体)
④ 2002年(H14)
・緩斜面の植林地は樹幹が大き
く、樹高が高くなる(8)
・竹林の面積が急速に拡大して
いる可能性がある(9)

1946年～2002年
かつて農耕地として利用されて
いた斜面地は放置され、樹林化が進
行。樹林が大きく生長する一方、竹林
拡大が著しい

寺山
名古木
2025年(R7)

名古木の歴史と棚田

名古木(ながぬき)は、古くは「奈古木」などとも書き、秦野盆地の北東端・大山などに連なるならかな丘陵上に位置しています。地名は、なごやかな安住の地を意味する「和城(なごき)」が転訛したとも『中都勢誌』、ならかな傾斜地の小平地を差すもの『秦野地方の地名探訪』とも言われています(『角川地名大辞典』4 神奈川県)。

・**玉伝寺ご住職の話:**名古木の玉伝寺は、曹洞宗「玉伝寺」開基の没年が1598年であることから、1500年代後半の創建と考えられ、周辺には住民が住んでいたことが推測できます。

・歴史史料:寛文5年(1665年)の「なこのき村」の田畠売買証文(『秦野市史』)があり、名古木村の田畠の存在を確認できます。元禄15年(1702年)の村高371石、「天保郷帳」(天保期:1830~1844年)の村高402石、『新編相模国風土記稿』(天保12年:1841年)によれば、名古木の家数は93軒です。

・**「十日市場絵図」の解説**(『岡田・秦野の歴史』)によれば、「秦野盆地では、十日市場を中心江戸時代後期ごろに一段と商業活動が盛んになり…」とあり、その「絵図」の平坦部は畠地であり、山裾のきわに田地の表示があります。つまり、江戸後期ころには、山あいの傾斜地に田んぼ(棚田)を開墾したのではないかと思われます。

・近代報徳運動の源流の一つとされる「安眉庄七」は、寛政元年(1789年)相模国大住郡蓑毛村(秦野市)で大山御師の朝田家の次男として生まれ、曾屋村十日市場(秦野市)の穀物商安眉庄院家に婿入りました。その後、報徳仕法を学び、出生地やその隣村・小蓑毛で報徳仕法による村おこしを行い、成果を上げました(『近代西相模の報徳運動～報徳運動の源流と特質』早田旅人・夢工房)。名古木村は同じ東地区にあり、小蓑毛村とは寺山村を挟んだ東側に位置します。報徳仕法による村おこしは隣村にも伝わり、平坦地の畑の烟草栽培や丹沢山麓の狭隘な谷戸にも米づくりのための開墾が及んだと思われます。

・**名古木在住のドン会会員・関野和之さんの話** 私の父親の父、つまり祖父の代には棚田を耕作していた。(明治期以降の開墾か?との片桐の問い合わせ)いやそれ以前、江戸期ではないかと思う。

「丹沢自然塾」苗取り・田植え教室
(2025年5月24日)



開墾・復田前のように
(2002年4月)



開墾・復田後のように
(2025年5月)

2 棚田の復元と米づくり～有機無農薬・自然の恵みに感謝！

荒れ地を開墾～棚田の復元



〈上〉 耕作放棄された名古木の棚田
2002年4月



野焼き
2002年6月



〈右〉 身の丈以上の雑草を刈り、灌木を伐採 同年6月



人海戦術で復田作業開始
同年8月

手づくり堰堤と水路掘削

水を引く前の棚田 2003年2月



復田した田んぼに水を引き、土を耕し、畔を塗る 2003年5月



自然の恵みに感謝！～太陽と水と大地へ

左: 溪水を引いて米づくり
(北田: 東海大学農業実習田)
右: 柳田開き。東の空に昇る太陽に感謝！

下段・左: 手づくりの水取り入れ口。小川から水を導水し、溜め池～水路へと流す。増水時はオーバーフローする仕掛け。

中: 溜め池から最上段の棚田への水路。太陽のエネルギーで水温を上げて棚田へ流す。足洗い場も設置。

右: 棚田最下段のビオトープ。アカハライモリ、カエルなどの水生生物が生息する。



冬期湛水と循環する田んぼの土づくり



人力による有機・無農薬の米づくり





3 担い手づくり～都市と農村をむすぶ「丹沢自然塾」

「丹沢自然塾」のカリキュラム

2025年「丹沢自然塾」年間スケジュール

- ① 4月12日(土)「丹沢自然塾」開講オリエンテーション・棚田の種まき教室
 - ② 5月24日(土)棚田の苗取り・田植え教室
 - ③ 6月21日(土)棚田の草取り・観察教室
 - ④ 7月12日(土)田んぼの生き物観察教室(講師:北野 忠 東海大学教授)
 - ⑤ 8月16日(土)そばの種まき教室
 - ⑥ 9月20日(土)棚田の稲刈り教室
 - ⑦ 10月 4日(土)収穫米の脱穀・精米教室
 - ⑧ 11月22日(土)収穫祭(しめ縄飾りづくり・葉バッタづくり体験教室)
 - ⑨ 12月13日(土)新そば・手打ち体験教室
- <2026年>
- ⑩ 2月14日(土)里山管理教室+自然塾修了式



名古木の棚田の復田作業や田んぼの米づくり、安全安心な野菜づくり、そば・小麦づくりや、里山の管理作業の担い手などをどのように養成したらよいのでしょうか。

2002年は「里山・里地グリーンサポーター

「野良人」の募集、2004年からは、前期・後期に分けて「自然塾」を開催するなど、試行

を重ねました。2006年からは、通年の「丹

沢自然塾」に改編し、年に10~12回のカリ

キュラムで塾生を募集し、新たなスタートを

切りました。

効率やモノ優先の社会から「スローライフ・生きがいづくり」の志向が広がる中で、塾生募集は新聞各紙に取り上げられ、神奈川県内を始め、東京・埼玉・茨城県取手など、首都圏の大都市周辺から第1回「丹沢自然塾」には50名余りが応募。都市の自然・農業体験希望者と農村をむすぶ回路・仕組みをつくることができました。以後、現在に至るまで、一般紙や地方紙・地元タウン紙などの塾生募集記事や、HPによる情報発信、公共施設でのチラシ配布、塾生経験者・メンバーの口コミなどにより、毎年、新たな塾生が多数参加しています。

「丹沢自然塾」で1年間、自然・農業体験を

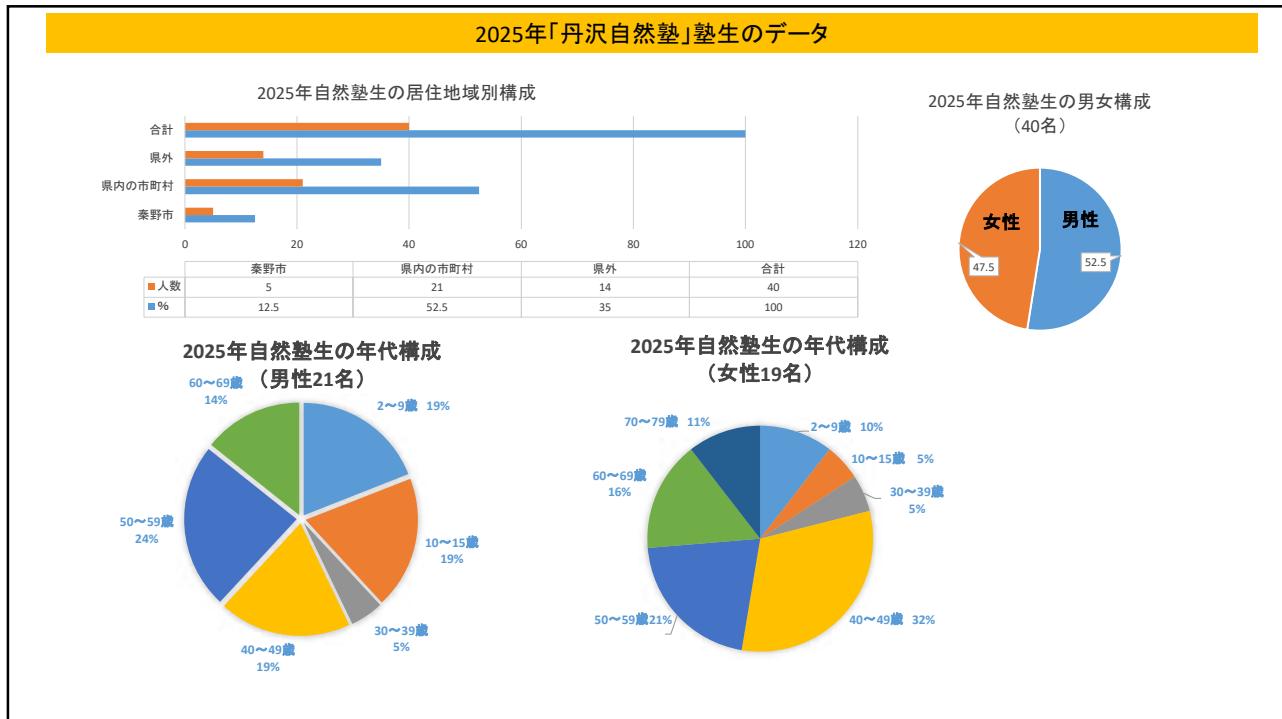
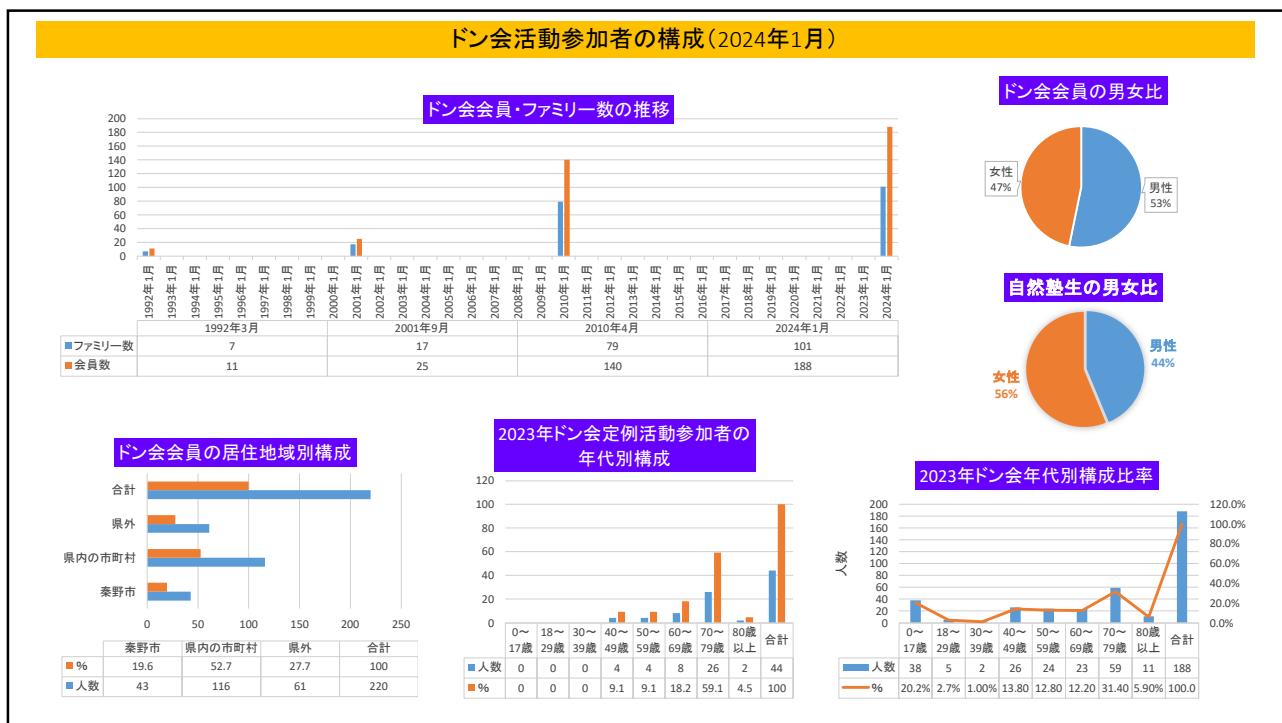
した塾生が名古木に自分の活動の居場所を見つけ、「丹沢ドン会」会員になり、新たな塾生を迎えます。2024年の塾生25家族

中12家族が新たにドン会会員になりました。

「塾生から里地里山維承の担い手へ」という好循環が出来上がりました。

The collage consists of nine photographs arranged in three rows of three. The top row shows a close-up of a person's hands working in soil, a group of people sitting in a grassy field, and a wide view of a rice paddy where many people are working in the mud. The middle row shows people washing laundry in tubs outdoors, a large group of people standing in a field, and people working in a garden. The bottom row shows people working in a field, a group of people gathered together, and people working in a field.





4 繼続が力に～ Do for Nature「丹沢ドン会」とは？

「丹沢シンポジウム」開催から33年



1991年11月『ドンドンが怒った～森の動物たちの反乱』(夢工房)刊。

1992年3月丹沢会設立。Do for Natureは、「身近な自然のために一人ひとりの一歩を踏み出そう」の意味。同年11月丹沢の自然と私たちの暮らしを考える第1回丹沢シンポジウム「丹沢が危ない！」を開催。その成果を広く市民と共に共有するためには、ブックレット「丹沢が危ない！」を刊行。以後、登山道の補修ボランティアやシンポジウム・学習会を継続的に開催した。菩提のそばで、種まきから始めるソバの栽培、ソバ打ち体験教室を開催した。

2001年9月NPO法人に。

2002年、秦野市名古木の荒廃した棚田の復元活動を開始し、米づくり、そば・野菜などの安全・安心な食べものづくりを始めた。

2004年、都市と農村をむすぶ「丹沢自然塾」の開催により担い手を確保し、里地・里山に人の手を加えることで生き物たちが甦りました。

2006年12月第3回「国境サミット in 丹沢」を秦野市と協働で開催し、全国のNPO団体と交流し、ネットワークを結びました。

2016年10月篠谷いずみ東京大学名誉教授を招き「生物多様性経験シンポジウム」を開催。

2017年4月からは、東海大学自然環境課程北野・藤吉両研究室、慶應義塾大学一ノ瀬研究室の協力を得て3年間にわたる「名古木の自然・環境総合調査」を実施し、その成果を『丹沢山ろく名古木 田んぼの生き物図鑑』として刊行(2021年9月 梦工房)した。

2017年7月に開催した、親子で自然に親しみ、自然を学ぶ「丹沢こども自然塾」には80名余の参加者を得て、次世代継承への希望を託しました。

2022年3月農水省「つなぐ棚田遺産」の「名古木の棚田群」として県内で唯一認定。

2024年8月第20回石井進記念「棚田学会賞」受賞。

丹沢ドン会は、ファミリー会員制、0歳から80代まで、ドン会会員・自然塾生の130家族の居場所が名古木にあります。世代循環により、生物多様性に富んだ名古木の棚田・伝統的な農村風景を次世代へつなぐために、ドン会40年～50年を目指して活動を継続します。



情報発信 ① 出版・雑誌掲載



情報発信 ② 新聞掲載記事(2024年12月～25年5月)

ドン会HP



全国農業新聞(2025年5月16日)



東京新聞2025年4月

情報発信 ③ テレビ・ラジオ

2005年4月27日、NHKテレビ「おはよう日本」で名古木の棚田復元活動を中継放送。

2006年6月4日、NHKテレビ BS2「おーい、ニッポン私の好きな神奈川県」で名古木の復元棚田で田植えのようすを全国へ生放送。地元の農家・関野光治さんの指導で田植え。秦野市在住の秦野ふるさと大使・苅谷俊介さんが出演しました。



2007年5月21日 NHKテレビ「ふるさと一番！」名古木の棚田から全国へ生放送。放送後に、山咲トオルさん、地元の方々、ドン会メンバーで記念撮影。



TVKの丹沢
ドン会の米づくり
チユーブ

TVK（テレビ神奈川）は、2022年4月の田んぼづくりから田植え、刈り取り、収穫祭までを取材し、11月30日に「秦野市の棚田 地元保全団体の思い」として放映しました。

2006年11月27日、エフエム横浜のスタジオでドン会活動をトーク。放送終了後に記念撮影。



丹沢ドン会の情報発信の要は、一般紙・地元紙・タウン誌によります。「丹沢自然塾」の塾生募集の記事の掲載は、ドン会の里山活動と扱い手のマッチングに欠かせません。ドン会活動に社会的な意味を見出した記者たちは、繰り返し取材し、紙面化してくれました。NHKテレビやラジオ・地元TVKテレビの放映も広ドン会の活動を知ってもらうきっかけになりました。マスコミ・ミニコミはもとより、ドン会会員・自然塾の塾生の口コミやドン会HPによる情報発信も有効です。さまざまな媒体をとおして、里山活動の魅力を発信し、都市と農村をむすぶ太いきずなが出来上がりました。

活動を支えた官民ファンドと受賞・選定のあゆみ(2001年～2025年)

2001年	丹沢・心のボランティア管理運営委員会より寄付金	「NPO法人自然塾丹沢ドン会」神奈川県より認証
2002年	秦野市商店会連合会より助成金(第1回「丹沢山麓展」開催)	富士ゼロックス端数値楽部より助成金
2003年	秦野市商店会連合会より助成金(第2回「丹沢山麓展」開催)	
	イオン環境財団より助成金(「名古木の自然 丹沢の雜木林・棚田の復権と生き物たち」発行)	
	日本財団より助成金(「はじめの一歩」)	
	神奈川新聞社・同文化厚生事業団より(「神奈川地域社会事業賞」受賞)賞金	
	第18回「手づくり郷土賞」(地域活動部門)(国土交通省)受賞	
	秦野市商店会連合会より助成金(第1回「わいわいはだの市場」&第3回「丹沢山麓展」開催)	
	丹沢のみどりを育む森づくり実行委員会より助成金(登山道整備・緑化)	
2004年	「神奈川県ボランタリー活動推進基金21」補助対象事業に選定(3年連続)	
	東海大学付属本田幼稚園エコクラブより寄付金	
	「日本の里地里山30 保全コンテスト」選定(環境省・読売新聞社)	
	環境省の「里地里山保全再生モデル事業」に「秦野市等」として指定	
	山と溪谷社より賞金(第2回「山岳環境賞・B賞」受賞)	
	ドコモ市民活動団体助成金(「丹沢山麓里山・田んぼ物語 伝統的景観復元と地域再生マニュアル」発行)	
2005年	東海大学付属本田幼稚園エコクラブより寄付金	「みどりの日」自然環境功労者表彰 環境大臣表彰受賞
2006年	セブンイレブンみどりの基金より助成金(「名古木の水生生物・哺乳類と野の花たち」発行)	
	国際ソロブチミスト秦野より賞金(「クラブ賞」受賞)	
2013年	「川崎基金」設立(横浜市在住の川崎恵美子氏より、NPO法人日本生前契約等決済機構を通して多額の寄付金)。ドン会特別会計として、遺贈者の遺志に適う活用法を検討・実施している)	
2018年	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社より助成金	
2019年	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社より助成金	
	公益財団法人日本生態系協会より助成金(第11回「関東・水と緑のネットワーク」の新規拠点に選定)	
2022年	農林水産省「つなぐ棚田遺産～ふるさとの誇りを未来へ～」に「名古木の棚田群」として選定	
2024年	名古木の棚田復元・米づくり活動が「第20回石井進記念棚田学会賞」を受賞	
2025年	イオン環境財団より助成金(名古木の里山活動に対して)	

* イオン秦野店のイエローレシート・キャンペーン(毎月11日に実施されるキャンペーン。イエローレシートを消費者が支援したいボランティア活動団体のボックスに投函。投函されたレシートの金額の総額の1%を活動団体に還元する)では、活動団体登録ナンバー1で参加。20数年にわたり、助成金を受けている。

ドン会活動と環境省・自治体との連携・協働

神奈川県ボランタリー活動推進基金21

2004年2月、丹沢ドン会の「丹沢山ろくの里山里地保全再生事業」が、平成16年度「神奈川県ボランタリー活動推進基金」対象事業に選定。審査委員長の堀田力さんは「里山保全に未来はあるのか?」と講評されましたが、都市と農村をむすぶ新たな企画や実践力が評価され、以後3年間で総額約550万円の助成を得て、ドン会の里山保全活動の推進力となりました。補助金は、耕運機・運搬機・ツババなどの機械器具などの購入や2006年12月に秦野市と共に開催した「第3回塊サミット」の開催にも寄与し、NPO法人化以後のドン会活動の展開、情報発信に大きな力となりました。



環境省「里地里山保全再生モデル事業」

2004年7月、環境省「里地里山保全再生モデル事業」全国4か所の一つに「秦野市等」として丹沢ドン会が選定され、都市近郊の里地・里山の身近な自然再生の未来を託されました。ドン会では、「丹沢自然塾」の開催により、都市から農村へ里山保全再生活動の担い手を呼び込み、さまざまなメニューを用意して23年間にわたり活動を継続してきました。雜木林の管理、棚田の復元と米づくり、そば・小麦や野菜づくりなど、安全安心な食べものづくりにより、丹沢山ろく・名古木に参加者のそれぞれの居場所をつくり上げました。



秦野市「ふれあいの森づくり事業」

里山の保全再生に全国に先駆けて取り組んだ秦野市は、「ふれあいの森づくり事業補助金」制度を立ち上げ、活動団体への支援を行いました。制度の根幹は、地権者と活動団体に秦野市が加わり、3者で荒廃した里山の管理・利用契約を結び、里山の保全再生を図ることです。地権者は、行政が加わることで安心して荒廃地の再生を活動団体に託します。活動団体は、市の紹介により活動地を確保し、管理面積に応じて助成金を得る。秦野市は、両者を結び里山の保全再生事業を達成できる。まさにウインウインの関係づくり。現在、30数団体が丹沢山ろくで活動し、それぞれの活動地の現地視察をして学び合い、課題解決のための情報共有を図っています。



大学・企業との連携・協働

東海大学～農業体験実習～

東海大学自然環境課程・室田教室の学生40名余りは毎年、名古木の棚田・北田の米づくりを授業の一環として行っています。2024年は5月11日(土)水路の疏木捨い・水路づくり・田んぼのゴミ拾い・草取り、5月18日(土)田起し、6月1日(土)代かき・畦塗り、6月8日(土)田植え、6月29日(土)田んぼの草取り、9月28日(土)稲刈り・ハサ掛け。学生たちは米づくりの体験を通して日本の食料自給率や食文化を考え、棚田を未来へつなげる一翼を担います。若者たちとの交流はドン会メンバーのエネルギーの元となっています。

東京農業大学～生物多様性・自然観察実習～

東京農業大学の学生たちは、名古木の棚田の周辺の里山において、毎年年度始めの4～5月に自然観察実習を行っています。名古木在住の同大・竹内教授が指導。名古木の里山を歩き、棚田の中央を流れる小川やビオトープの水生生物・植物を観察します。毎年150名前後の学生が多様性豊かな名古木の自然に触れ、自然との付き合い方を学び、実習に参加したうちの10名近いが、田植え・稲刈りのボランティアに参加。

**東京大学・イオン環境財団・秦野市
～里山活動とフレイル予防～**

イオン・東大里山ラボは、「里山コモンズの再生」をテーマに、秦野市と連携してフレイル予防と里山活動の関わりを調査・研究しています。イオン環境財団・東京大学高齢社会総合研究機構・秦野市森林ふれあい課・高齢介護課とNPO法人自然塾丹沢ドン会は、2023年9月にフレイル簡易チェックの測定・アンケートを実施しました。図らずもドン会の里山活動が、フレイル予防に有効であるという結果が出ました。「産・官・学・民」の連携による、加齢による心身の虚弱化(フレイル)に対して、フレイル予防の3要素「栄養・運動・社会参加」のすべてをそなえているシン合の里山活動。2024年8月31日、9月14日にはさらに詳細な測定・アンケート調査を行いました。科学的な分析・検証を経て、里山活動がフレイル予防に効果的であり、健康長寿につながることが立証され、「里山の新たな価値」の創出につなげたものです。

農水省「つなぐ棚田遺産」県内唯一「名古木の棚田群」の選定(2022年3月) 第20回石井進記念「棚田学会賞」受賞(2024年8月)

「つなぐ棚田遺産」選定

名古木の棚田群

1999年に選定された「棚田百選」全国134地区は、認定から20年以上を経過して、担い手の減少や農家の高齢化により從来のような保全活動が難しくなり棚田の荒廃の危機に直面しています。2022年3月、農林水産省では、棚田地域の振興に関する取り組みを積極的に評価し、地域の活性化や棚田の有する多面的な機能に対する国民の理解と協力を得ることを目的として、優良な棚田を「つなぐ棚田遺産」として認定しました。

県内で唯一認定された「名古木の棚田群」では、NPO法人自然塾丹沢ドン会と地域の農業者の連携のもと、棚田の維持や「丹沢自然塾」による農業体験、自然体験など、都市住民等との交流事業を通じて、生物多様性に富んだ農村の原風景を次世代へつなぐ活動を実践しています。

**名古木の棚田群
「丹沢ドン会の棚田」**

「棚田学会賞」受賞

名古木の棚田群

2024年8月24日(土)午後、「第20回石井進記念棚田学会賞」の授賞式が早稲田大学早稲田キャンパス3号館で行われ、NPO法人自然塾丹沢ドン会が受賞の栄誉に浴した。授賞式には、可児理事長と前理事長の片桐の二人が出席。「棚田学会賞」選考委員長の堀口健治早稲田大学名誉教授による講評は以下のとおりです。

都市近郊の市街化調整区の白地の農地の棚田を2002年以来復田し、「丹沢自然塾」の仕組みを創設して都会と農村をむすび狙い手を育成・確保。活動を20年以上にわたり継続し、次の世代につなげるバトンを務めながら活発化している。復田した棚田のみならず、周囲の里山を含めた生物多様性の再生保全に取り組んでいます。2017年から3年かけて名古木の自然総合調査を実施、植物252種、動物586種、合計1338種を確認。その成果を「丹沢山ろく名古木棚田の生き物図鑑」として刊行した。名古木の棚田を核としたつづつ、里山全体をどうえながら、都市型の棚田管理の先駆をつけた一連の活動は「棚田学会賞」としてふさわしい。

**名古木の棚田群
「丹沢ドン会の棚田」**

5 ドン会活動とネイチャーポジティブ～生物多様性のいま

学び・深める「生物多様性・緑陰フォーラム」

2016年10月、秦野市名古木の棚田の原で、丹沢ドン会25周年記念 生物多様性 緑陰フォーラム in 名古木「さとやまと生物多様性の今」と題してフォーラムを開催した。籠谷いづみ(東京大学名誉教授)さんが記念講演「保全生態学から見た、さとやまと生物多様性の今」を、北野忠(東海大学教授)さんが「名古木の水生生物の現状と意味」をレポートした。オープニングには、ドン会会員のフルクロリスタ・木下尊博さんがフルクローレのミニコンサートを奏でた。



次世代へつなぐ～丹沢こども自然塾



2017年7月30日に開催した「丹沢こども自然塾」は、秦野市森林づくり課・共催、秦野市教育委員会・後援により応募者80名余りの多数となり、午前・午後の2部制に変更。慶應大学一ノ瀬研究室の大学院生・学生8名が企画・当日の指導、丹沢ドン会のメンバーが運営に当たった。

当日のメニューは、①森に学ぼう「自然のふしきクイズ！」②生き物観察「田んぼや小川にいる生き物を調べてみよう！」③竹細工「竹を使って作品づくり！」④ブランコ遊び「林にある木をつかってブランコ遊びをしよう！」の4つ。午前・午後とも各3班に分かれ、名古木の棚田とその周辺で自然体験。共通の体験することで親子のコミュニケーションが深まり、笑顔が棚田に広がった。「もっとブランコ遊びがしたい！」「来年もまた来たい」との子どもたちの声が多数寄せられ、自然体験の事前・事後の親と子どものアンケートにも、「自然を楽しむ・学ぶ」ことで、自然への関心・興味が深まった。

2018年の第2回は台風の影響で中止、2019年は、第3回「丹沢こども自然塾」を8月4日に開催した。



生物多様性のいま～名古木の棚田の自然総合調査

東海大学・慶應義塾大学との連携<2017年4月～20年3月>



丹沢ドン会の伝統的な農村風景を次世代へ継承するための活動の場である、秦野市名古木の復元棚田の周辺の自然調査(2017～19年度)は、東海大学自然環境課程の室田・北野・藤吉教授の各研究室と慶應大学一ノ瀬研究室の協力・連携により3か年の最終報告が2020年8月にまとまった。

<東海大学>水生生物・水質・土壤・植生
<慶應義塾大学>昆虫・哺乳類・野鳥

各年ごとの中間報告と、3年間の調査を経た本報告により、名古木の自然のいまを知ることができた。棚田を復元し、米づくりすることで(人間の手を加えることで)里地・里山の生物多様性的保全・再生に資することができた。豊かな自然環境は、生き物たちにとっての楽園であると同時に、人間の生存にとっても不可欠な存在であることを改めて確認した。





シカ



シュレーゲルアオガエルの卵塊



タイコウチ



カヤネズミ



カヤネズミの巣



ホトケドジョウ



アカハライモリ

調査の成果～「丹沢山ろく名古木 棚田の生き物図鑑」

植物252種、動物586種、合計838種の生き物を確認

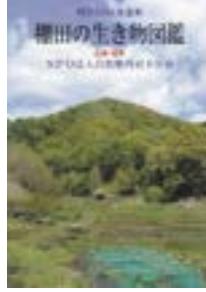
2017年4月から3年にわたり実施した秦野市名古木の自然調査は、2020年8月に最終報告書が提出されました。東海大学人間環境学科自然環境課程の北野忠・藤吉正明両研究室と、慶應義塾大学一ノ瀬友博研究室の調査により、**植物252種、動物(クモなどを除く)586種、合計838種の生き物**が確認。丹沢ドン会のフィールド(復元棚田は約1ヘクタール)とその周辺という限られたエリアにもかかわらず、これほど多数の生き物が生息する名古木の自然の豊かさを実感する結果です。同時に、この地域で20余年にわたり丹沢ドン会が取り組んできた棚田の復元活動と、有機・無農薬の米づくりや野菜づくりなどが果たしてきた役割の大きさを再確認しました。里地・里山に人の手が入ることで豊かな自然がよみがえりました。

名古木の自然調査の成果は、『丹沢山ろく名古木 棚田の生き物図鑑』(夢工房)として、2021年9月に刊行。図鑑は、子どもたちや広く市民に身近な自然の大切さを知るテキストとして、あるいは自然観察ハンドブックとして活用してもらうために、秦野市内の小・中・高の全校を含む、市内の公共施設50か所に各2冊、合計100冊を献本しました。

私たちの安全・安心な食べものづくりの活動と、生き物たちの多様性との共存は、名古木に限らず全国共通の課題です。このような**伝統的な農村風景をつぎの世代へ引き継ぐ**ことは、いまに生きる私たちが未来から託されたテーマでもあります。名古木の自然の豊かさと、丹沢ドン会の棚田の復元・米づくり活動のあゆみを広く市内外の人びとや子どもたちへ伝えづけます。

**名古木の自然調査で確認できた
絶滅危惧種及び準絶滅危惧種**

植物では、イチョウウキゴケ・ミズニラ・ミズオバコ・イトリゲモの4種、動物では、カヤネズミ・ホンドギツネ・ニホンイタチ・ヨタカ・スリ・オオタカ・ヒバカリ・アカハライモリ・カヤコオロギ・オオムラサキ・コンボウアメバチ・コツブゲンゴロウ・エサキアンボなど39種、合計43種。








ドン会活動とネイチャーポジティブ～よみがえる水生昆虫・植物

2017年2020年にかけて行なった「名古木の棚田の自然総合調査」の後も、慶應義塾大学の大學生は、ドン会フィールドに継続的に訪れカヤネズミの生態を定点観察しています。

東海大学の北野忠先生は、20年以上継続してドン会の名古木の棚田の生き物を観察。2025年7月の「田んぼの生き物観察教室」の事前下見で、これまで名古木では見ることのなかった水生生物を確認しました。「マグラコガシラミズムシ」というまったく有名ではない虫ですが、結構珍しい種です。中井町では見たことがありますが、秦野～厚木周辺ではこれまで記録のない種です。おそらく、どこからか飛来して新たにこの地にやってきたのだと思いますが、棚田が維持されることで、生き物たちにも生息環境を提供している良い事例だと思います。」

東海大学の藤吉先生は、向田の実験田んぼで学生たちと福を育てながら周辺の植物の観察を続けています。新田に新たに復旧した「マコモ田」で「ミズニラ」を確認しました。

「見つかった場所は、棚田の一番下の新しマコモ水田にされているところです。あそこ付近の水田土壌中にはミズニラの胞子が眠っているようですので、掘り返し水をためると出てくるみたいですね。移植までは必要ないと思いますので、除草時にあまり抜かないように配慮していただければ幸いです。」

また、田植え作業後の生き物観察で学生が名古木では少ない「マルタニシ」を見つけました。

名古木の棚田で米づくりをすることで、多様な生き物たちがよみがえりました。ドン会活動を長年にわたり継続することが、自然再生・自然復興＝ネイチャーポジティブにつながっています。2012年の記録を最後に確認されていない「シマゲンゴロウ」がある一方で、定期観察をしていると、かつて当たり前のように全国の里山に生息していた昆虫や植物がよみがえるのを確認できます。

2022年7月丹沢自然塾「田んぼの生き物観察教室」






東海大学藤吉研究室
の実験田んぼの田植え(右上)
マコモ田んぼでよみが
えったミズニラ(右中)
マルタニシ(右下)

6 棚田から見える～地球温暖化・気候変動

ゲリラ豪雨・台風の被害と官民協働の復旧作業








地球温暖化や気候変動による自然界へのさまざまな影響は、名古木の棚田においても、ゲリラ豪雨や台風の大暴雨などの被害が頻発している。近年の異常気象は地球規模で常態化し、他人事ではなくなってきた。

2020年7月3日、大雨により、棚田下の護岸が崩落。放置すれば、棚田の米づくりに影響する。秦野市環境共生課に相談すると即、農業振興課に橋渡し。現地を視察・確認した担当職員は、補修に必要な資材の提供を地元生産組合を通して行いたいと申し出た。資材の無償提供を受けて、崩落個所の復旧作業はドン会メンバーが担った。

さらに22年9月26日、台風15号による大雨は、20年に補修した護岸の上流・下流を襲い、秦野市から再度の補修資材の提供を受けた。行政が資材を提供し、NPOが労力を出して、この自然災害を早期に乗り越えることができた。官民協働の実践である。

台風10号の遠隔豪雨による名古木の棚田の被害(2024年8月)



つなぐ棚田遺産「東の棚田」



つなぐ棚田遺産
「ドン会の棚田」北田



2024年8月末、台風10号の遠隔豪雨により、農水省「つなぐ棚田遺産」選定の名古木の棚田群も被害を受けた。北田の東側法面の崩落により、水路が埋没し、棚田に土砂が流れ込んだ。

被害は東の棚田(左上)にも及んだ。この棚田には国の復旧予算が付いたが、ドン会棚田(右)は秦野市から杭などの資材の無償提供を受けてドン会が復旧作業を担うことになった。まずは、ため池と化した水を流すために仮水路の掘削作業から始めた。



水路掘削・崩落法面の土留め作業



2025年の年明けからシャベルと一輪車で水路の掘削を始めました。秦野市から提供を受けた杭を3段に打ち、間伐材を横に渡して土を盛る。崩落斜面の土留め、水路復旧、田んぼの畦づくりに3か月を要しました。



水路復旧・法面土留め事業の完成

つなぐ棚田遺産「ドン会の棚田」北田

2025年5月、秦野市農業振興課の職員2名による復旧事業の現場確認が行われ、併せて、秦野市で作成した「つなぐ棚田遺産」の表示看板の受け渡しがありました。

つなぐ棚田遺産「東の棚田」の復旧

7 仲間づくり～自然の循環と人の循環

- ・地域に入る第一歩はあいさつ
- ・風土と地域の名人の技と知恵を生かす
- ・「丹沢自然塾」の出会いと担い手づくり
- ・やるなら楽しく得意技を生かす
- ・自分時間の使い方「世のため人のため」
- ・仲間づくり・居場所づくりは「思いやり」から
- ・「自然のための一歩」は人間社会に還る
- ・自然の循環は人間の都合を少し控えて
- ・世代交代プラス世代循環がドン会流
- ・未来の子どもたちへ多様性をつなぐ

**さとやまコモンズ
(共有地・資源・宝物)
の再発見**

自然の循環を支える人の連なり

丹沢ドン会の活動は、1992年に始まりました。第1回丹沢シンポジウム「丹沢が危ない！」のパネリストにお呼びした鍋割山荘の草野延孝さんの呼びかけで、翌年4月から表丹沢の登山道の補修ボランティアに参加し、仲間たちと繋ぎながら登るうちに、ブナの立ち枯れや野生動物など、丹沢の自然の窮状をこの目で見ることができました。シンポジウムには地元の「神奈川新聞」の記者が多数取材に訪れ、翌1993年1月1日から連載「丹沢の悲鳴」が始まり、丹沢の自然の危機的状況が示されました。また、丹沢の自然と私たちの暮らしや企業の経済活動が離れてなく結びついている現状を知ることもできました。ブナ枯れの原因は複合的で、大気汚染もその大きな要因と考えられました。工場の出す煤煙や車の排ガスが海風とともに丹沢に流れ木々の立ち枯れを引き起こしていました。

表丹沢の山頂のブナ林から中腹のスギ・ヒノキの人工林地帯、さらに山ろの里山のクヌギ・コナラの雜木林は里地の田畠へとつながり、私たちの暮らす市街地、さらに河川を経て海へと連なります。山域に降った雨や雪は、大地に染み込み、自然のろ過装置を経て、おいしい水を地下に蓄えます。表土を滑り降りた水は沢に集まり、川となり相模湾へと流れ、雲・雨となり山域に降り注ぎます。大きいなる自然の循環がここにあります。

私たちの暮らしや社会・経済は、この自然の循環の上に成り立っています。その一部分でも不健康で、循環が途絶えたなら、と想像してみましょう。まして、いま地図規模の気候変動・地球温暖化が進行しています。待ったなしの瀬戸際に私たちは立っています。

丹沢ドン会の里山活動は、Do for Nature 身近な自然のために小さくてもいい自らの一步を踏み出そう、の想いを込めて始めました。ファミリー会員制をとったのは、家族ぐるみで自然・農業体験をすることで世代を超えて活動の意味を伝え、将来の子どもたちにいまとある風景を伝えたかったからです。「丹沢自然塾」によって都市と農村をつないで担い手を養成する仕組みをつくり、活動の継続性を担保しました。子育て世代のファミリーから、現役世代、さらにシニア世代がドン会の活動を支えています。自然の循環を支えているのは私たち一人ひとりの人の循環です。

活動継続・仲間づくりのヒント

・「あいさつ」が一番！

小田急線秦野駅からバスで10分、上原入り口で下車、昔ながらの家並みや新しい住宅地のそばを通り、農道を進むと12~3分ほどで別天地・名古木の里山空間・桃源郷に入ります。その道すがら出会った、散歩する人、通勤する人、農作業中の、誰彼構わず、地域の人びとに「おはようございます！」とあいさつします。最初はお互いにぎこちなくとも、あいさつし続けました。1年、2年経つうちに顔見知りとなり、立ち話もするようになりました。

ドン会が名古木で活動を始めたころ、「丹沢ドン会」って何？といふかっていた地域の人たち、地域の農家の名人・お師匠さんの手ほどきを受けながら農家に代わって素人集団が人海戦術で荒廃した柳田を復元して米作りをしている。柳田がよみがえり苗が育ち、畑で野菜が育つを見つめながら、昔ながらの里山の風景が復活しつつある名古木のドン会フィールドのようすを好ましく見てくれるようになりました。少しずつ地域の信頼を得ることができます。

その最初のアクションが「おはようございます！」コンチは！のあいさつでした。「あいさつ」は、最初で、最高のコミュニケーションの入口です。

・平らかな仲間づくり

ドン会の活動には、子育て世代のファミリー、定年年齢の会員や定年後のシニア世代が多数参加しています。会員の年齢構成を見ても、60~70~80代のシニアが49.6%を占めています。

かつて、組織の中でそれなりの役職に就き、肩書きや名刺で肩で風を切って日本経済の一翼を担ってきた人たちです。そんな人たちが多く、非営利の活動団体の中に入ってきました。

ドン会には、もくもくと自分の作業をこなす人、作業中も周囲の人たちに話しかけ、笑いを振りまき場を盛り上げる人、作業の手順を考え、つぎの作業がやり易くなるように工夫を加え、思いやる人など、さまざま個人性を持った人たちが集まっています。ドン会フィールドに来たら、かっての肩書き捨てよう。シニアも若者も、女性も男性もいません。まっさらな一人の人間として古き良き会社員時代の意識をそのまま持ち込まれてはたまりません。そこには、先に根を張って地域で活動している女性たちがいます。

自然が大好きで、誰に指示されることもなく、率先して自分のやるべき仕事(作業)を見つけ、体を動かす。それぞれの動きにあかしの総体が安全・安心な米づくり、野菜づくりにつながり、自然からの恵みを分かち合います。誰一人、居なくていい人はいません。

ドン会創設の1992年以来、ドン会では「平らかな仲間づくり」を目指して活動しています。

・個性を尊重し、得意技を生かす

ドン会会員の一人ひとりは、それぞれの仕事や人生経験を経て、繰り返して名古木のフィールドと出会うことができました。

ドン会には、もくもくと自分の作業をこなす人、作業中も周囲の人たちに話しかけ、笑いを振りまき場を盛り上げる人、作業の手順を考え、つぎの作業がやり易くなるように工夫を加え、思いやる人など、さまざま個人性を持った人たちが集まっています。ドン会フィールドでは、お互いの個性を認め、尊重し合うことで、穏やかにゆるりと活動を続けることができます。

人は、仕事や趣味を通してさまざまな得意技を磨いてきました。これまででは、会社の仕事のため、自分の趣味のためにだけに使ってきた得意技を、そのままにして置くのはモッカイ。自分の得意技や生活の知恵を少しずつ持ち寄り、みんなのために、他の人のために、自然のために使ってみませんか？

ドン会フィールドでは、そんな気持ちを抱きながら活動を続けています。自己犠牲ではなく、自分の得意技を少し他の人たちや自然のために生かす「利他」の思いを持ち続けたいものです。お互いの個性を尊重し合い、自分の得意技をドン会活動に生かすのです。

・楽しく活動・居場所づくり

ドン会の定例活動日は毎週土曜日。年末年始の2週間ほどを除いて、会員や自然塾の有志たちが名古木の柳田に集まり、それぞれの作業に励んでいます。柳田の米づくり班、畑の野菜づくり班、里山の管理班、今年度から新たに「フレイル予防」を目指して「軽作業班」を設けました。自然が相手のことです。取り組んでいる作業の進み具合によつては、「作業班のライン」で連絡を取り合い、週半ばに急きょ作業日を設けて活動することもあります。

「丹沢自然塾」の開催の可否の判断については、前日の夕方に台風や豪雨の予報が出ない限り、基本的に「小雨決行」ドン会流です。定例活動日、朝から雨が降る中、会員が集まり始めました。テントを張り作業の準備をしているうちに雨脚が強くなりましたが、五人、六人と会員が集まります。雨脚はさらに激しく、作業どころではありません。持ち寄った食材を集め、即席の交流会に。土曜日はドン会の日、雨が降ろうが雪が降ろうが名古木へ。雨の日もまた楽しなのです。名古木が居場所なのです。

せっかく活動するなら、楽しくやろう！がドン会流。楽しい活動は脳を働かせ、工夫が生まれ、活動を継続するモチベーションになり、目標達成の近道。さりげなく自分の得意技を生かす楽しい活動は、それぞれの居場所づくりです。火起こし・屋のみそ汁づくりが得意な人、HPのリニューアル作業に進んで手を上げる人、竹林管理の方法を調べ里山で実践する人、泥んこになって田んぼの米づくりを率先する人、土植えや福刈りなど人の手が足りない時に都合をつけて駆けつけてくれる人、収穫祭のフルクローラーに友情出演してくれる音楽家、目の見えない年配の兄さんと一緒に参加了女性は、畑仕事に汗をかき、ベンチで男性は半日みどりの風や野鳥やカエルの声を聞き、休憩時間や昼ご飯のみんなの話の輪に加わります。それぞれの大切な居場所が名古木にあります。




世代交代プラス世代循環

2004年7月、環境省の「里地里山保全再生モデル事業」に「秦野市等」として指定を受け、全国に先駆けて秦野市が里地里山の保全再生活動に取り組み始めました。以来、里山活動団体が「ふれあいの森づくり事業」で秦野市・地権者・活動団体の3者で協約し、面積に応じた補助金を受けて活動費を得て、30数団体が活動中です。しかし近年、いくつもの団体が無くなったり、その活動の継続が危ぶまれています。共通の課題は、高齢化による担い手の減少、情報発信、活動資金の調達に集約されます。

1992年に創設した丹沢ドン会は、2002年にNPO法人化し、2025年に33年目にに入りました。これまでドン会活動を継続し、「生物多様性に富んだ伝統的な農村風景」を次世代へつなぐエネルギーを蓄えることができたのは、男女や世代を超えた「ドン会パワー」の総合力です。

「丹沢自然塾」の塾生募集により子育て世代のファミリー層が都市から名古木に集まりました。地域への入り方に不安を覚える団塊世代の男性が、その連れ合いさんと一緒に自然塾の門をたたきました。コロナ禍の2年間は塾生の募集はできなかつたものの、自然塾からドン会へといふ流れ、新しい人材を確保し、受け入れる仕組みを編み出し、定着できました。「丹沢自然塾」こそが、ドン会の活動継続の命綱と言えます。

ドン会では、60~70~80代のシニア世代の会員が50%近く占める一方、他の活動団体に見られない特徴は、30~40代の子育てファミリー世代が14%、50代の現役世代が15%と、一定数存在していることです。さまざまな年代の会員の、ドン会に寄せる想いや声を日常的に聞くことができます。若者世代の行動力と、日常生活に欠くことができないツールとなつたIT関連の対応力。シニア世代の経験知や仲間づくり、地域との付き合い方や暮らしの知恵、ドン会創設の理念の継承など。それぞれの世代の得意分野をドン会活動に生かすことができます。

単なる「世代交代」ではなく、世代間の風通しを良くし、それぞれの得意技を生かして、つねに組織の運営を見直し、新しい企画を立て、会員が生き生きと活動することができる環境や居場所をつくり上げることが可能になりました。これが、ドン会流の「世代循環」です。

団塊世代が核となって生まれたドン会の活動も33年、2年前に73歳の私から、50代半ばの新理事長にバトンをつなぎ、本年、80歳の務務理事から50代前半の新しい専務理事にバトンを渡しました。ドン会流の「世代交代プラス世代循環」により、ドン会40年~50年を目指す体制を整えることができました。



名古木のサンマ

名古木には、1500年代後半に、すでに曹洞宗・玉伝寺が存在していました。周辺には農民がいて畑を耕し食料を得、裏山の落ち葉や枝を集め、クヌギやナラの木を伐り日々の燃料にしていましたことでしょう。また、江戸時代後期には山あいには柳田が存在して稲作が行われ、畑ではソバやタケノコの栽培があり、現代に伝わる農村の生活文化がありました。たゆどう歴史の「時闇」が流れていました。また、人びとが手を加えることによって、適度に更新された里地・里山には、生物多様性豊かな伝統的な農村風景が広がる自然の「空間」、場所がありました。名古木の柳田とその周辺の里山を、私たちちは23年間にわたり里山活動をつづけてきました。そこには想いを同じくする「仲間」がいます。それぞれの得意技を少しずつ持ち寄り、自然のためにいい汗をかき、自然の恵みを受け取っています。自然のために踏み出した小さな一步は、結果として私たち一人ひとりに心身の健康、豊かさをもたらしてくれました。名古木には、「三つの間」=「サンマ」があります。名古木の「サンマ」をつぎの世代にしっかりとバトンをつなぎたいと思います。



8 生物多様性に富んだ名古木の棚田を未来へ



未来の子どもたちへバトンをつなごう！

名古木の復元棚田の米づくり。ファミリー会員制の丹沢ドン会では、1歳から90代まで、多様な年代の多様な個性を持つ男女が、平らかな仲間づくりをしながらドン会活動を支えています。参加者のそれぞれの得意技を少しずつ持ち寄り、日常の活動に生かしています。世代交代と共に、それぞれの世代が個性と持ち味を生かして活動を活性化し、継続性を図る「世代循環」がドン会流です。

「丹沢自然塾」によって都市と農村をむすび、担い手を育成しています。有機・無農薬の米づくりによよみがえった棚田の生物多様性を保全・再生するドン会活動は、ネイチャーポジティブ（自然再生）につながります。地域の人びとと共に行政と連携し、名古木の伝統的な農村風景を次の世代へ引き継ぐことがドン会のテーマです。網子で土に触れ、土を耕し、自然に学び、自然の楽しみを受け取る。人間の都合を少し控え、自然と共存できる活動をつづけましょう。

ドン会40年～50年に向けてさらにパワーアップして楽しく活動をつづけます。一人ひとりが Do for Nature 自然のために身近なところでちょっと勇気を出して一步踏み出し、実践しましょう。自然のための一歩は、めぐりめぐって人間に帰って来ます。自然是未来からの贈り物。子どもたちの未来が笑顔で輝くよう、バトンをつなぎましょう！

